2012年（平成24年）
第60号
（12月15日）

平安月報

The HEIAN monthly report

発　行　所：立正佼成会　京都教会
発行責任者：渉外部長　宮地啓安
〒605-0041　京都市東山区三条蹴上
TEL (075)762-2211　FAX (075)762-2266

宗教協力の誓いを新たに　～新宗連結成 60 周年・京都府協議会結成 20 周年記念集会～

加盟７教団から３４０名参集

11 月 29 日、立正佼成会京都教会において新日本宗教団体連合会（新宗連）結成 60 周年・新宗連京都府協議会 20 周年記念集会が行なわれ、各教団の会員など約 340 名が参加した。

まず、新宗連近畿総支部会長・京都府協議会相談役・天恩教教主・鉢呂神龍氏が「京都府協議会発足から今日までの 20 年」と題して講演を行った。同氏は「現代は秒速単位で動いており、我々アナログ世代にはなかなかついていけない。しかし、どの世代の人も神仏を見るのにギャップを感じないように、時代が変わっても変わらないものがある。それを若い世代の人に伝えていく必要がある」と述べた。

鉢呂神龍氏の講演

60 周年記念映像

講演の後、新宗連 60 周年記念映像「60 年の絆―新たなる誓いを」が上映され、「新宗連の意義と歩み」をテーマに記念鼎談が行われた。

鼎談では、新宗連名誉会長・近畿総支部相談役・円応教教主・深田充啓氏、庭野平和財団理事長・元首都圏総支部会長・庭野欽司郎氏、元新宗教新聞編集長・宗教評論家・清水雅人氏の 3 人が新宗連の歴史や思い出話などを語り合った。

3氏の記念鼎談

親睦を深め、来年もさらに協力を

12 月 7 日、毎年恒例の新宗連京都府・滋賀県協議会合同の懇談会が滋賀県・大津プリンスホテルにて開催された。今回は滋賀県協議会が受入れを担当した。

また同日、京都府協議会・青年会も三条木屋町で懇談会を開催した。

懇談会及び両協議会議長

「平安月報」60号　新年から衣替えへ

おかげさまで、本紙を５年間発行することができました。これを機会に、次号から下記のような取り組みを実施します。今後ともよろしくお願いいたします。

①発行日を月初に変更（毎月１日発行）します
②インターネットでお届け（メール送信）します

※メール希望の方はメール・アドレスをご連絡ください
→uetta2004@yahoo.co.jp　まで（広報委員長・植田）

お知らせ（１月の教会行事）

１月	１日（火）	元旦参り	６：３０～
	７日（月）	御親教	９：００～
	１５日（火）	釈迦牟尼仏ご命日	９：００～
	２２日（火）～３１日（木）	寒中読誦修行	
		毎朝６時～　（法華三部経読誦）	
	２７日（日）	京都教会成人式	９：００～

※２月３日（日）に「節分会」が開催されます。

時事刻々

先日、利用した市バスの車内がクリスマス用にデコレーションされていた。荷物置きにクリスマスツリーが飾られ、天井にはリボン、窓にはシールを貼っていた▼寒風の中バス待ちをして乗ったのだが、乗客はみんな笑顔を見せていた。交通局の職員の思いやりを感じさせる光景だった▼振り返るとこの一年間は、景気は一向に好転せず、庶民の生活は厳しい状態が続いた。企業は合理化を進め、消費者が伸び悩んだ▼ほんの数十年前まで、大方の日本人の日頃の生活は質素なものだった。正月だけはと、晴れ着を着て、おせち料理でご馳走して、新年をお祝いしていた▼当時の人は、そんな暮らしに不平を言わず、少しのことで感動し、感謝していた。現在は、不足不満を訴える人が多すぎる▼満たされない世の中だから、心のゆとりが必要だ。ちょっとした心掛けが人の心を明るくできるといい。

庭野開祖のような人になろう

～「開祖さま生誕会」にて～

11 月 15 日、大聖堂において「開祖さま生誕会」が開催され、全国の会員は衛星中継を通して式典に参加した。

式典は青年女子部員の奉献の儀、続いて庭野光祥次代会長導師による読経供養が行われ、日鑛会長の「啓白文」を奏上した。その後、体験説法があり、最後に庭野日鑛会長の法話があった。

法話に立った庭野会長は、蓮の特徴として「華果同時」「汚泥不染」「徒花（あだばな）なし」を述べ、蓮の華のように、人生苦という汚泥に染まらず、教えに沿って生きることの大切さを説いた。

さらに、庭野開祖の人柄を太陽のように明るく温かいと振り返り、一人ひとりがそうした人間になろうと呼びかけた。

「一人ひとりの心田を耕す」の取り組みを推進

～平成２５年次教団方針より～

来年次も自己の「心田を耕す」ことに取り組み、その広がりにより社会・世界の平和に貢献する。

平成二十五年次の方針

本会は教団創立六十周年（平成十年）以来、『一人ひとりの心田を耕す佼成会』の総合目標を掲げています。

そして、七十周年（平成二十年）からは、全会員へのご本尊勧請を推進し、取り組んでいます。

このような歴史的過程により、仏教の三宝帰依の基本形態が、本会においては確立するに到りました。

いよいよ私たちは、世の中が大和（だいわ）・調和する上で大切な釈尊の精神及び開祖さま・脇祖さまの精神である、慈（じひ）しみ思いやるこころ（明るく優しく 温かく）を深めて、人間としての道を歩んでまいりましょう。

アフリカ３か国へ毛布２万９３４９枚をおくる

先月、今年の「アフリカへ毛布をおくる運動」で集められた毛布の総枚数と配付国が、同運動推進委員会から発表された。

4 月から 5 月までのキャンペーン期間中に全国から寄せられた毛布は 2 万 9,349 枚。その毛布を昨年アフリカ東部で発生した大規模な干ばつにより、ソマリアからの難民が集中するケニアをはじめ、モザンビーク、マラウイの３カ国におくることにした。

また、併せて呼びかけられた海外輸送協力金は、11 月 5 日現在で 3,232 万 211 円に上った。

■毛布配付国／現地パートナー団体、予定枚数

ケニア／アフリカ開発緊急機構＝19,869 枚

モザンビーク／共同体開発キリスト教協会＝1,500 枚

モザンビーク／ＫＵＬＩＭＡ＝3,000 枚

マラウイ／マラウイ赤十字社＝4,980 枚

清掃奉仕で心を清め、神前で世界平和を祈願

11 月 23 日、伏見明るい社会づくり運動の会（伏見明社）は恒例の藤森神社清掃を行った。朝 10 時に集まった会員 13 名が同神社の参道を清掃した。その後、本殿において「平和の祈り」を行った。

全員で本殿を参拝し、「世界が平和になりますように、人のことを思いやる人が増えますように、まず私からやさしくなします」と『祈りの言葉』を唱和して世界平和の祈りを捧げた。

●合掌・礼拝

③礼拝する心から芽生える寛容と慈悲の精神【続】（いつでも、どこでも、だれにでも実践できる行法）

仏教では「この世の中はそのままで、すでに平和な世界である」と教えています。しかし、私たちの周りを見てみますと、争いや対立が毎日のように起こっています。自他の相違だけに目を奪われ、自分より優れている者を妬み、自分より劣っている者を蔑む。そして自分と主義や主張、考えなどが異なる者は排除する。こうしたことが紛争や差別の原因になっているといっても過言ではありません。「平和を乱しているのは、人間である」といわれるゆえんです。人間もそろそろこの愚かな行為に終止符を打ち、仏性に目覚め、本来の姿に戻るべき時にきているのではないでしょうか。

ところで、合掌・礼拝は佼成会独特の形ではありません。合掌は仏さまや菩薩などを礼拝する時の作法で、仏教徒の間では日常のあいさつにも用いられています。これは古くからインドで行われていた儀礼作法の一種で、それが仏教にも取り入れられました。インド人は右手を神聖な手、左手を不浄な手として使い分ける習慣がありますが、神聖な右手と不浄な左手を合わせることは、仏性と煩悩を併せ持つところに人間の姿があるとの考えに基づいているといわれています。また右手は仏、左手は衆生を表すものとして、両手を合わせることが仏と衆生を合体した姿――すなわち成仏の相を象徴しているとの説もあります。

いずれにせよ、深い意味のある合掌・礼拝行を私たちはおろそかにすることはできません。

今月の言葉　～「おかげさま」を数えてみよう～　京都教会長・佐藤益弘

いよいよ 12 月を迎え、何かとあわただしい季節になりました。今年一年を振り返り、感謝の心を大切にしながら生活させて頂きたいと思っております。

さて、機関誌『佼成』12 月号では、**「『おかげさま』を数えてみよう」**というご法話を会長先生から頂きました。

前半の、**「苦が喜びに変わる」**というお話では、縁起や無常、空などの真理を認識することによって、苦が喜びに変わると教えてくださっています。自分中心の考えに固執していますと、自分にとって都合の良いことはプラスであり、喜びであります。反対に、自分にとって都合の悪いことはマイナスであり、苦しみでもあります。常日頃、自分が喜ぶご縁に巡り合った時に、「おかげさま」と手を合わせることは容易にできます。しかし、自分にとって都合の悪い時や、苦しいと思う時に、「おかげさま」と手を合わせることは、瞬時に出来るものではありません。なるがゆえに、**真理を認識することが重要**で、それによって目の前に起きた現象をありのままに観て、幸せを感ずることができるということを学ばせて頂きました。

先月 25 日に、私の亡父の年回供養をさせて頂くため、京都から東京の自宅へと向かいました。その日は、三連休の最後の日曜日であり、夕方の京都駅は、紅葉を見に来られて家路へと急ぐ大勢の観光客でいっぱいでした。新幹線の指定席は満席で、自由席に乗車するしかありませんでした。何本もの「のぞみ」が到着しても、長蛇の列で、乗車するのに時間を要しました。ようやく乗れたのは、自由席車輌の多い「こだま」でした。１時間近く待って、そのうえ所要時間の長い列車に乗り、思わず「疲れた」と声を発してしまう状況でした。新幹線に乗車できたことと、無事に東京駅に到着できたことについては、「おかげさま」と思えました。しかし、不都合に思う部分は、自分の心の中に残ったままでした。なぜ、混雑する時期に帰宅するようになってしまったのか、他の日に設定すればよかったとか、目の前に起きた現象を丸ごと受け入れ、幸せと感ずるまでには至りませんでした。

そんな時、『佼成』12 月号のご法話を読ませて頂き、現象そのものはプラスでもマイナスでもない、ゼロであり、「空」であるという真理を学びつつ、心田を耕しました。すると、混雑の中、難儀しながら列車で移動をするという現象から、**さまざまな見方ができ、新たな気づきを頂けた**のであります。先ず、大勢の人々と一緒に乗車できることが有り難いということです。１６両編成の新幹線に、私だけが唯一の乗客であったら、何となく寂しく、乗る気になれません。次に、所要時間が長いということは、同じ料金で、普段よりも長時間、席に座る権利を付与されていることも有り難いことです。さらに、世界一安全な高速鉄道に乗せて頂けたことなどです。そう受けとると、苦と思っていたことが喜びに変わりました。

そのことから思いが広がり、私が小学生のころ、新幹線のない時代に、父の郷里である岐阜県・飛騨金山まで連れて行ってもらったことを思い出しました。その時は、もっと混雑していて、お土産とともに荷物も沢山あったように記憶しています。そのうえ、私たち子どもが迷子にならないようにと気を遣いながら、現在より何倍もの所要時間がかかったことと思いますと、父の優しさや、親の恩というものに、あらためて感謝の念をもたせて頂きました。當に、父親のお蔭様を感じ、心から手を合わせられる人になるために、相応しい現象であったと受けとることができました。

私自身、今月のご法話から、**不都合なこと、嫌なことと思える中にも「おかげさま」と受けとれることが必ずある**ということを学ばせて頂きました。それらも含め、身近な「おかげさま」を数えられるよう、今月も精進させて頂きます。

ジャーナリストからみた佼成会

11 月 13 日、佛教大学四条センターにて開催された公開講座で「新聞記者のみた新宗教」と題して、京都新聞総合研究所特別理事の吉澤健吉氏が講演を行った。10 回シリーズの 7 回目で、今回は本会について講演された。

吉澤氏は 25 年前に比叡山宗教サミットを機会に各宗教界のトップにインタビューしたのがきっかけで、庭野日敬開祖と出会った。新宗教は恐いものと思っていたが、開祖と会って親しみと、ふところの大きさを感じたという。

延暦寺の山田恵諦座主がサミットの開催にあたって「延暦寺は能舞台、自分たちは舞台の松、舞台で舞うのは諸宗教者」と述べられ、裏方に徹したというが、庭野開祖は同じ考えを持たれ、佼成会は国際会議の黒子役に徹し、菩薩行を実践していると評価した。

ジャーナリストの視点から、佼成会はパワーが減少していると見ているが、拡大し続けると分裂を生じる。一度は立ち止まって内省し、教団のあり方を見直す時期にあるとしている。

そして、次代会長・庭野光祥は開祖のＤＮＡを受け継いでおり、今後、次代会長の活躍に期待したいとして話を結んだ。

庭野開祖の宗教観・平和観　「一乗の道」

≪万感が胸に≫

第６回世界宗教者平和会議で、ローマ法王ヨハネ・パウロ二世教皇がスピーチに立たれた。「宗教は戦争や暴力に反対するものです。この会議の中で、この信念を具現化する道を見つけられるように祈ります」スピーチを終えて退場される教皇にお礼を申し上げようと、庭野開祖がおそばに近寄ると、教皇は日本語で「ありがとう」を三たびもくりかえし、手を差し伸べて温かく包まれた。ＷＣＲＰにとっても、また庭野開祖にとっても歴史の新しい１ページが加えられたのだという喜びで、胸が満たされるのをおぼえた。

開会式を迎える前日、庭野開祖はサンピエトロ大寺院を訪ね、ローマ教皇パウロ六世が眠る墓所に詣でた。世界会議が開かれる国を訪れた時は、まずその地で平和の礎となられた人々の墓所を訪ねることにしていた。そのみ霊に感謝の誠を捧げ、会議の成功を祈るのだが、教皇パウロ六世の墓参は特別の意味を持っていた。聖ペトロ大聖堂の階下に歴代の教皇が眠られている墓所がある。その入り口で、庭野開祖はひざまずいてお祈りをした。

1965年、第二バチカン公会議第四会期の開会式に仏教徒として初めて参列した時、謁見室で温かく迎えて下さったパウロ六世との出会いが、庭野開祖の後半生の生き方を決定づけたと言ってもいい。あれから39年が経ったのである。いまその聖ペトロ大聖堂に立つと、当時の公会議の模様がよみがえり、パウロ六世のお声が聞こえてくる思いがした。懐かしさが胸いっぱいに広がった。

東西冷戦構造が崩壊して初の世界会議となったイタリア会議は、バチカンでの開会式のあと、イタリア北部・トレント市郊外のリバデガルダ国際会議場に会場を移し、連日、全体会議、研究部会が進められた。東西冷戦構造崩壊後の世界には、地域・民族紛争の激化という新たな課題が生まれていた。それに対して、WCRPはどんな役割を果たせるのか。「行動」の重要性が繰り返し指摘され、現実問題に対する具体的な行動計画が討議された。

旧ユーゴスラビアなどの紛争の背景に宗教の存在が指摘されていることから、政治と宗教の関係、不寛容な宗教に対するアプローチについても、真剣な討議が行われた。会議の最終日、21世紀にむけての宗教の役割を示した「リバデガルダ宣言」が全員一致で採択され、7日間にわたるイタリア会議の幕は閉じられた。

諸行無常が真理であるからには、絶対に崩れることのない平和というものは存在しえないのかもしれない。しかし、だからこそ、つねに平和への努力を怠ってはならないのである。それを放棄してしまったら、この世界はさらに悲惨なものになることは火を見るよりも明らかだ。たとえ恒久平和の世界は理想にすぎないとしても、その理想を高くかかげて努力し続けなければならない。**宗教者はつねに絶望状態や地獄の中に極楽を見つける努力を怠ってはならないのだと、国際会議を終えた時にいつも肝に銘じるのである。**

≪法華経の三つの柱≫

かつて東洋大教授の金岡秀友先生が、法華経の精神について、こんなふうに話して下さったことがあった。法華経には三つの柱がある、と言われる。**「法華経は他との融和の精神を持った経典として、広く世界に認められてきました。これが法華経の第一の柱です。**

おのれの宗教の尊さを知りながらも他の宗教の尊さも知るという、宗教にとっていちばん難しくて、いちばん大事な考え方です。この精神が『信ずるところを異にする宗教も究極においては一致する』と信じて力を合わせる宗教協力を可能にするのです」つまり、一仏乗の万教同根の精神であろう。法華経が融和の経典であるゆえんである。

金岡先生はさらに、**「法華経の第二の柱は、一見、融和の精神の柔らかさとは正反対のように見える『私がやらなければならない』という使命感に貫かれていることです。宗教協力は一つの可能性であって、それを実現していく道には様々な困難が待ち受けています。それを誰が切り開くのか。『誰か人がやってくれるだろう』というのでは、永遠にそれは実現しません。**

『私がやらなくては』と、身をもってその精神を行動に移し、人々に広めていかなければならない。それも、他のどこでもなく、いま自分がいるその場で、この社会で、この世界で実現させていかなければならないのです」「我身命を愛せず、但無上道を惜む」という「勧持品第十三」の言葉が象徴するように、法華経は使命感を与え、実際に行じる経典なのである。（つづく）

渉外部からのメッセージ

山中伸弥京都大教授のノーベル医学生理学賞授賞式の様子がテレビで放映されていました。同じ京都市民として大変誇りに思います。山中教授は授賞式に際し、自身の功績ではなく日本国が頂いた賞だと文化勲章を身に付けられて望まれたことやノーベル賞は過去のことで今後は科学者としてすべきことをしたいと話されたことなど、謙虚でいて目標を見据えられる姿に感動を覚えました。我々も見習っていきたいと思います。

この月報はホームページでもご覧頂けます。
アドレスは http://rkk-kinki.blog.ocn.ne.jp/kyoto/